

高仲 顕 初代ガリオア・フルブライト中部同窓会会長のご逝去を悼んで

愛知学院大学名誉教授 今光廣一

ガリオア・フルブライト中部同窓会の初代会長であった高仲 顕(たかなかあきら)氏が、今年(2013年)1月20日、92才をもって永眠されました。

同氏は(社)中部産業連盟副会長を経て、(株)リーム中産連会長ならびに愛知工業大学教授を歴任されるとともに、国内よりも海外において著名な国際的経営コンサルタントでありました。

太平洋戦争が始まった1941年に横浜高等工業(現横浜国立大学)建築科を卒業、同年に立川飛行機(株)設計科に就職され、翌年海軍少尉に任官後、横須賀・大村海軍航空隊においてゼロ戦(零式艦上戦闘機)その他の整備に従事されました。1942年に除隊となり、会社に復帰されてからは各種の戦闘機を設計されています。1945年終戦後も引き続き会社に残り生産管理部長、飛行機修理工場長等を歴任され、米軍のF80や、F86等の修理も手がけられています。

同氏は数多くの専門書を執筆されていますが、後年に「零戦のマネジメント」というユニークな経営評論書を上梓されています。本書は当時世界的にたぐいまれな高性能戦闘機を持ちながら、その機能を封殺するグラマン戦闘機の開発によって空中戦で敗退してしまっただけを分析し、バブル経済崩壊後の日本経済の立て直しについて、明確なグランドデザインを提示されています。本書の発行から、すでに20年近い今日にあって、終章に掲げられた13箇条は、今日の日本の政界や産業界が進むべき道を極めて的確に示しています。その内容として、科学技術の面で日本の産業界は未だ世界をリードする局面にはなく、「守」、「破」、「離」の「破」の段階に漸く達しつつあるに過ぎないと説明されています。この「守・破・離」とは、千利休が茶道の心得として残したのものともいわれており、武道の心得としても広く知られています。守はひたすら師の教えを守る段階、破は他の流派の技も取り入れ、これまでの守から抜け出して新しい次元を求める段階であり、離は守も破も意識しない独自の道を確認する段階とされています。外国で人気のあるジャスト・イン・タイムもTQC(total quality control=全社・総合的品質管理)も、もともとアメリカにあった考え方を日本流に作り替えたものであると本書の中で述べておられます。また、これらを支えてきたのが年功制、終身雇用、合議的意志決定、会社別労組などの日本独自の慣習であり、これまで自分に都合のよい土俵での相撲であったと主張されています。そしてこれからは官僚機構の肥大化、癒着、天下りのみならず、産業界における系列、傘下、協力企業との馴れ合いや、相互もたれ合いが熾烈な国際競争にマイナスの効果をもたらすと、今日までの20年にわたる日本経済停滞の原因を喝破されています。共生についても、自分たち特殊グループ間のことでなく、公正な競争下においてグローバルに行われるべきであると述べておられます。これらの見解は、前述のように日本国内での外国人技術者との交流経験に加えて、35年に及ぶILO(国際労働機構)やAPO(アジア生産性機構)での活動、さらには中部産業連盟における産業界との直接的な知見を通しての所産です。

同氏が中部産業連盟に就職されたのは1953年ですが、1951年にガリオア留学生としてイリノイ大学とパーデュー大学に学ばれています。フルブライト留学制度の発足が1953年ですが、当時の日本は連合軍の占領下にあり、外国への出国は禁じられていて、アメリカ留学は夢のまた夢の世界でした。1951年度の東海北陸地区のガリオア留学生

選抜試験には、現在の国立名古屋病院の建設される以前の広大な陸軍練兵場跡地に 3000 名の受験生が集まりました。その中から合格者が筆記試験で 20 名に絞られ、さらに口頭試問を通して最終 10 名が残されました。これは筆者が当時の名古屋アメリカンセンターのシャウイン館長から聞いたものです。アメリカ留学は I. E. のメッカといわれたパーデュ大学が中心で、動作時間分析の泰斗と謳われたマンデル博士に師事され、帰国後は日本の I. E. (管理工学) 発展の教祖的存在として学界や産業界に多大な貢献を尽くされました。

その故をもって高仲 顕氏は、101 年の歴史を持つ経営研究団体の SAM (Society for Advancement of Management) より、2004 年度の国際賞として The Gilbreth Medal Award を受賞されました。SAM は、科学的管理法で有名な F. W. テイラーが 1912 年に生産性の向上を通して人類の幸福と繁栄を図るという目的をもって設立した機関です。アメリカに本部を置き、世界に 1 万人近い会員を擁しており、国際賞は世界中の候補者から選ばれる各年度の最高栄誉賞です。日本ではそれまでに 13 名の方が受賞されており、海外ではピーター・ドラッカー、アルフレッド・スローン、リンダール・アーウィック、リアン・ギルブレスなどの著名な人々も受賞されています。

私たちは、高仲 顕氏の残された多くの業績や貢献を偲びながら、心からのご冥福をお祈りいたします。